

氏名・(本籍地)	鈴木 誠(東京都)
学位の種類	博士(人間学)
学位記の番号	甲第51号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	中学校生活で居場所を見失った生徒への臨床教育学的アプローチ
論文審査委員	主査 村瀬 嘉代子 副査 滝川 一廣 副査 森岡 由起子

## 鈴木 誠氏 学位請求論文審査報告書

### 「中学校生活で居場所を見失った生徒への臨床教育学的アプローチ」

#### 論文の内容の要旨

多岐にわたり、重層的構造を持つ本論文の内容をその特質に即して簡潔に要約すれば、不登校現象を子どもの心理や家族の問題、あるいは学校制度や教育体制の問題に還元して理解したり対処しようとしてきた従来の諸研究を研究的にレビューして批判的に検討し、生徒個人と教師との関係という新しい視点から不登校とそれへの対応を捉え直し、「通級学級(相談学級)」の果たすべき役割、ひいては教師の果たすべき仕事を実践性のある内容で明示した論考ということができる。

著者はこの検討を90年代以降クローズアップされた子どもの「居場所」というテーマから始める。教室を安心や得心のもとに居られる居場所とすることができず不登校になる児童生徒の多さが指摘されて、このため学校の内外に「居場所」を設ける取り組みが盛んになったのが90年代からであった。保健室登校の推進や通級学級の設置もそうした流れから生まれたものである。著者はこれまでの「居場所」の研究や実践をレビューして考察し、ともすれば実体的な空間や場所として捉えられ扱われていた「居場所」をメンタルな空間、子どもと教師との「関係」こそが子どもにとって真の居場所だというラディカルな認識を明らかにする。

個々の児童生徒と個々の教師との「関係」のなかに、つまり両者の間に安心や得心が育まれたとき、その関係こそが「居場所」となる。そのような「居場所」を教師が育むことが不登校の児童生徒への支援であると著者は結論づける。この認識に立って著者は、不登校を児童生徒の個人病理とみなす偏見を捨てたとして概して評価されてきた「不登校は誰にでも起こりうる」という文部省のテーゼに疑問を呈する。この一般化・非特異化によってそれぞれの不登校の個性や子どもの個性が捨象されて、その子個人と教師との「関係」を通しての理解と支援が疎かになり、物理空間としての「居場所」や教育の外にいる「専門家」へ不登校児童生徒に対する援助を委ねようとする、いわば外注(不登校の外在化)が当たり前となってゆくことへの批判である。「目前の事実から教師は逃げてはならない」という著者の思いが行間に読める内容である。

この認識の背景には、著者自身の教師としての強い自覚と内省、および通級学級で不登校生徒と模索、研究を重ねながら長年、関わってきた実践経験がある。この経験についての詳細で多角的な分析が本論文の基幹部分をなす。これによって本論文は「教育には生徒と教師との人間関係が大事」といったステレオタイプな教育論とは内容を異とし、その「関係」とはどういうものか、「関係」を育むとは実地にはどうすることかを具体的に追究し検証した学術的・臨床的な内容となっている。本論文の後半がその基幹部分である。

後半の基幹部分は、通級学級で実際に関わった諸事例の分析研究、卒業生を対象とした質問紙調査による追跡研究、モデル的な架空事例を提示してその理解や対処についての教師・養護教諭・スクールカウンセラーを対象としたアンケート調査からなっている。ここでは個別事例の質的分析と調査結果の統計を用いた量的分析とが組み合わされて、先に要約した著者の認識の実証的な検証が行われている。

最後に著者は、本論文はすでに不登校となった児童生徒の支援のあり方の研究であって、不登校をもたらさぬ教育と教師のあり方の研究が今後の課題だと結んでいる。生徒を能動的に学校へ向かわせる力を育む「関係」の追究である。

### 審査結果の要旨

論文前半で「不登校」や「居場所」に関する諸研究が多く引用をまじえてレビューされており、不登校問題がどのように扱われてきたかの優れた歴史的な展望となっている。ただ、問題点を指摘すれば、客観的・事実的な展望が心がけられたせいか、それぞれの研究が示す不登校理解への著者自身の立場からの評価や、それらの不登校理解が生まれた歴史背景・社会背景についての掘り下げが必ずしも十分なされておらず、文字通りのレビューにとどまっているところが惜しまれる。

それがなされておれば、不登校を生徒と教師の「関係」という視点から捉え、その視点こそが重要だとする著者の認識が、過去の諸研究や諸理論とのいわば「格闘」を通して、より理論的なかたちで輪郭づけられたのではないと思われる。その輪郭が薄いぶんだけ、著者が繰り返し強調する上述の視点は、論述的には著者の経験的な信念から生まれた認識という印象を幾分残すものとなっている。これは著者自身が現職の教師で、なによりも教育現場をみずからの居場所と任じており、そこから生み出された論文であるということもあろうと考えられる。

論文の後半が、そこを補って、実証的な検証を試みた重要な部分である。特に卒業生の追跡調査は貴重なもので、「関係」という視点を生徒の側からの「振り返り」によって検証している。教師との関係改善と学級での生活の改善、友人関係の改善とが有意な相関をもっていることが統計的に明らかにされている。また大きな学校問題である「いじめ」について、生徒は「いじめ」そのものよりも出来事に対する教師の見えぬ振りの態度に辛さを体験をしているというのも重要な知見である。

また、架空事例による教師、養護教諭、スクールカウンセラーを対象としたアンケート調査は方法的にも独創的な工夫がこらされ、「教師自らの教育活動の再点検の必要性」という結論を導き出したことは新知見といえよう。

このほか示唆深い多くの知見が得られているが、ひとつ問題点として回収率が36%と十分には高くなかった点が指摘できる。これはこうした追跡研究につきまとう問題でもあるが、このことの意味も分析対象とされたらと少々惜しまれる。ここにも「関係」という問題が包含されているからである。

指摘したような瑕疵もあるが、全体を通して現場での長年の実践に裏づけられた労作であり、独創性あ

る優れた論文である。